

道具は手づくり



風折烏帽子(かざりえぼし)



腰褌(こしみの)



足半(あしわか)



松割木(まつわりぎ)



鵜舟(うぶね)



鳥屋籠(とやがこ)



鵜籠(うかご)

家族や仲間が支える

漁服や風折烏帽子などは、鵜匠の体にピッタリ合うように家族が心を込めて仕立ててくれます。腰褌は餅わらを使いシーズンオフに手作りでこしらえます。足半(水に濡れた船の中で滑らないようにしたかかとのないわらじ)も、当然鵜匠があみあげます。篝火に使う薪は松ヤニのしやすい赤松を使います。1日分ごとに分けてしばっておくのも鵜匠たちの仕事です。鵜匠とその家族、そして2人の船頭さんたちの協力で鵜飼の道具が準備されているのです。

職人たちの技が支える

鵜舟の寿命は約10年。全ては船大工の手作りなので設計図はありません。長良川を知る美濃市の船大工の技がたよりです。しかし、その船大工の後継者がなかなか見つかりません。そのため鵜匠が自分で鵜舟の修理をすることももあるそうです。

鵜の寝床である鳥屋籠や鵜が移動するときの鵜籠も手作りで。丈夫でないと鵜の重さに耐えることができずに壊れてしまいます。関市の職人が丈夫な籠を作ってくれているからこそ、鵜も安心して眠ったり移動したりすることができるのです。

シーズンオフには…

鵜飼のシーズンが終わると、鵜匠は鵜の世話や供養、道具の手入れに専念します。新しく仲間に入る鵜もこの時期にやってくるので、長良川での生活に慣れさせていきます。毎日鵜とふれあっていくことで、鵜の性格がわかり、信頼関係も増していくようです。冬場のふれあいの濃さが次の年の鵜飼での活躍につながっていきます。



鵜の特徴



★じっくり見ると…?

黄色い顔にエメラルドグリーンのかわいい目。とがったくちばしの先は魚を捕らえやすいようにちょっぴり曲がっています。

羽の色は…緑がかった黒！でも、実は長良川にやってきた頃の若い鵜は茶色の羽で覆われています。次第に黒っぽくなり一人前になるのです！



★どこから来るの？

鵜飼で活躍する鵜は、茨城県日立市十王町の切り立った海岸の岩場で捕らえられた海鵜です。川鵜では小さくて、たくさん鮎を捕まえることができません。そこで大型の海鵜をわざわざ取り寄せているのです。岐阜にやってきたばかりの鵜は新鳥(しんとり)と呼ばれ、鵜匠に大切に育てられます。



★ちょっぴりがわいそうだけど…

顔に鼻の穴が見つからなかったので、鵜匠さんに頼んで、鵜の口の中を見せてもらいました。左の写真にある大きな穴は、水中で獲った魚を飲み込む穴ではなくて、空気を吸うための穴だそうです。鼻なの？答えは×。鼻はずっと昔から水にもぐっていたために、水が入る穴がじゃまになり、退化してなくなってしまったということです。鵜はまさに魚を獲るために進化してきたのです。

★餌は川で獲った魚だけなの？

川で捕まえる魚だけでは、お腹がすいてしまいます。出番のない鵜もいます。そこで「ホッケ」という白身の魚が餌として与えられています。白身の魚ならば他の魚でも大丈夫。安定して確保できる魚ということでホッケが選ばれています。きっとみんなの中にも、ホッケを食べた子がいるんじゃないかな？



鵜飼で捕れた鮎は？



鵜飼で捕れた鮎は、「おおぶた」という箱に入れて旅館やお店などに届けられます。そこで、料理された鮎がお客さんに出されることもあるそうですよ。鵜が獲った鮎の側面には、くちばしではさんだ傷がついているのが特徴です。



おおぶた



鮎の塩焼き・一夜干し

まだ間に合う！



鵜飼へ行ってみよう！



10月15日までは、まだ鵜飼を楽しむことができます。観覧船に乗って鵜舟を間近に見たり、長良川プロムナードの川べりに座ってゆったり見たりすることができますよ。

【乗船料金(乗り合い船)】

- Aコース 18:15発
大人 3,300円 小人 2,900円
- Bコース 18:45・19:15発
(平日)大人 3,000円 小人 2,600円
(休日はAコースと同料金)

【問合せ先】

岐阜市鵜飼観覧船事務所 TEL 058-262-0104

